

脱アメリカ的正義の模索

フィリピンのスーパーヒロイン「ダルナ」

山本 博之

はじめに

「映画」的な大統領選挙

クリスマスの準備を毎年9月に始めるフィリピンでは大統領選挙の準備も早く、6年ごとの投票日より1年半以上も前から準備が始められている。大統領選挙は6年間の国政のあり方を左右する国民的な選択の機会だが、そこには「映画」的と言いたくなる要素がいくつか含まれている。

2016年5月に実施予定の大統領選挙は、現職のベニグノ・アキノ3世大統領が後継指名したマヌエル・ロハス前内務・自治相と野党側の大統領候補であるジェジョマル・ビナイ副大統領の一騎打ちかと思われたが、2015年6月に行われた支持率調査では無所属のグレース・ポー上院議員が42%の支持を集めて首位に立った¹⁾。同年10月の立候補届出締切の後、選挙管理委員会は国内居住期間などの出馬要件を満たしていないことを理由にポーを失格と判断し、これを不服とするポーの提訴を受けて最高裁判所が出馬資格を審理することとなった²⁾。

ポーは国民的映画俳優フェルナンド・ポー・ジュニア(通称FPJ、以下フェルナンド)と女優スーザン・ロセスの養女である。フェルナンドは2004年の大統領選で接戦の末にグロリア・マカバガル・アロヨ大統領に破れ、半年後に失意のうちに亡くなった。巷には実際はフェルナンドが当選していたが不正な操作によってアロヨが当選したとの噂もあり、フェルナンドの死去の翌年にポーが居住地をアメリカからフィリピンに移し、2013年の上院議員就任を経て今回の大統領選に出馬したことを、父親の「敵討ち」であるとドラマチックに語る人も少なくない。

大統領選挙に出馬するには、「生まれながらのフィリピン人」(natural born Filipino/citizen)で、選挙

に先立つ10年間フィリピン国内に居住している必要がある。アメリカ生活が長いポーが居住期間の要件を満たしているかが争点になっているが、その裏で、生みの親がわからないポーは「生まれながらのフィリピン人」であると確認できず、そのため出馬要件を満たさないとの訴えもなされている。これに対してポーの支持者からは、実の両親を探し出してDNA鑑定で親子関係を証明すればポーが「生まれながらのフィリピン人」であることが示されるはずなので実の両親を探そうという声も出ている。

大統領候補なので注目が集まっているが、ポーは特別な事例ではない。フィリピンでは、外国籍(特にアメリカ国籍)を持っていることがわかって公職³⁾やコンテスト優勝⁴⁾を剥奪されたという話は少なくない。外貌も話す言葉も他の多くのフィリピン国民とほとんど変わるところがなく、日常生活においてはフィリピン国民として扱われているであろう人物が、公職に就くために遺伝子レベルでフィリピン国民への帰属を証明しなければならない状況もさることながら、ポーが依然として高い支持を得ていることをどのように考えればよいのか。

また、本稿の関心に照らしてこの大統領選挙で注目されるもう1人の候補者に、ミンダナオ島のダバオ市長のロドリゴ・ドゥテルテがいる。ダバオ市はかつて海賊行為や犯罪行為で知られる悪名高い街だったが、1988年に市長に就任したドゥテルテは犯罪撲滅のために犯罪者を射殺してもかまわないと受け取れる発言を繰り返した。今日ではダバオ市は犯罪発生率が極

3) フィリピン出身でアメリカ国籍を取得していたロメル・アルナドは2009年にアメリカ国籍を放棄した上で2010年に北ラオ州のカウスワガン町長選で当選したが、アメリカ国籍の放棄後もアメリカのパスポートを使って出入国していたことが判明したために町長の職を解かれた。

4) 映画『ダルナ』の主演などで知られる女優のアンジャンネット・アバヤリはフィリピンで生まれ、幼い頃にアメリカに移住した。1991年にミス・ユニバースやミス・ワールドなどへのフィリピン代表を選ぶ国内コンテストのビニニン・ビリビナスのミス・ワールド部門で優勝したが、アメリカ国籍を持っていることが判明して優勝取り消しとなった。

1) 大統領候補の支持率調査はSocial Weather Station(<http://www.sws.org.ph/>)を参照。

2) 結果は2016年3月に出る見通しである。

めて低い街として知られ、私刑を容認しかねない発言に人権団体から批判がある一方で、犯罪が減ったことを歓迎する住民も少なくない様子である。

大統領選への出馬が噂されていたドゥテルテは2015年10月の期限までに立候補届出を行わなかったが、ドゥテルテと同じ政党に属するマーティン・ディノが届出を受理された後に立候補を取り下げ、立候補取り下げがあった場合は同じ政党に属する別の人物が引き継いでよいとする規定に従ってドゥテルテが大統領候補になった。大統領候補になった後のインタビューで市長在職中に容疑者の射殺現場に立ち会ったことがあると発言して物議を醸したものの、支持が大きく落ちることはなく、2015年12月の調査では20%の支持を得ている。

法で裁けない悪を法によらずに裁くという勧善懲悪の物語は、職務執行のために暴力的な手段も辞さない『ダーティーハリー』や『天下の副將軍』が地方を訪れて役人の不正をただす『水戸黄門』、超人的な力を備えた異邦人が超人的な脅威を排除する『スーパーマン』や『ウルトラマン』、悪の側にいた者が悪と対峙して悪を懲らしめる『仮面ライダー』など、洋の東西を問わず一定の人気があるジャンルである。いずれもフィクションであるとの了解の上で受け入れられているが、これを公職についている人物が公言し、しかも大統領候補として一定の支持を得ている状況を見ると、映画と現実の境が融解しているような気持ちに襲われる⁵⁾。

国民的英雄とスーパーヒロイン

フィリピンでヒーローと言ったときにまず名前が挙がるのは、イエス・キリスト、ホセ・リサル、ベニグノ・アキノ・ジュニアの3人である。イエス・キリストについては改めて説明する必要はないだろうが、キリスト教徒が圧倒的多数を占めるフィリピン国民の救世主である。ホセ・リサルはフィリピン独立運動の闘士で国民的英雄であり、植民地当局に捕らえられて1896年12月に銃殺された。ベニグノ・アキノ・ジュニアはフィリピンの政治家で、マルコス大統領の独裁政権から反対派の危険人物と見なされ、国外追放から帰国した1983年8月にマニラ国際空港で暗殺され、これが1986年2月のピープルパワー革命(フィリピン二月革

命、エドサ革命とも)のきっかけとなった人物である。この3人以外となると、ボクシング選手のマニー・パッキャオ、2015年1月にフィリピンを公式訪問したローマ法王、アメリカン・コミックス(アメコミ)の架空の人物であるスーパーマンなど、その時々流行や個人的な関心に左右されるようだが、先に挙げた3人は時代と地域を超えて名前が挙がるヒーローである。

この3人のヒーローに共通しているのは、自らの信じるところの実現のために立ち上がって志半ばで亡くなった「殉教者」であること、そしていずれも男性であることである。これに対し、ヒーローとしての人気はこの3人に及ばないものの、フィリピンで国民的に知られ親しまれているヒーロー(ヒロイン)にダルナ(Darna)がいる。

ダルナは架空の人物で、コミックから映画へ、さらにテレビへとメディアを変えて登場している。映画は、ダルナがメインの登場人物であるものだけで13作、客演やパロディーを加えるとさらに多くの作品が製作されている。テレビシリーズでは、アニメシリーズ1回を含め、これまでに4回シリーズ化されている。最新作は2009年のテレビシリーズで、最初にコミック誌に連載が開始された1950年から約60年を経てなお新作が作り続けられている。テレビCMに登場することもあり、フィリピン国民であれば老若男女を問わず知られている存在である。ダルナをモデルにしたスーパーヒロインの物語も多く作られており、本稿で紹介するゲイが変身するスーパーヒロインも生まれている。

本稿では、メディアを変えて受け入れられ続けてきたダルナを手がかりに、フィリピン社会におけるヒロイン(ヒーロー)像について考えてみたい⁶⁾。

1. 誕生——コミック版ダルナ

ヴァルガ——フィリピン版スーパーマン

ダルナがフィリピンのコミック誌に初めて掲載されたのは1950年だが、ダルナの前身であるヴァルガ(Varga)の初出は1947年に遡る。漫画作家のマルス・ラヴェロ(Mars Ravelo)が『ブラクラク・マガジン』(Bulaklak Magazine)の第4巻第17号(1947年7月23日号)でヴァルガの連載を開始した。後に『ブラクラク・マガジン』の編集者との見解の相違のため別の雑誌に

5) フィリピン映画の『牢獄処刑人』(原題On The Job、エリック・マッティ監督、2013年)は、刑務所に収監中の囚人が一時的に出獄して殺し屋になるストーリーで、「実話に基づく」と宣伝された。

6) 本稿で紹介するダルナおよびジャシヤ・ザトゥルナについては混成アジア映画研究会のメンバーである玉置真紀子さんに多くの点でご教示を得た。なお、本稿の理論的関心については[山本2016]も参照されたい。

移ることになったとき、契約上の都合で別のタイトルをつけなければならなくなり、連載のタイトルと主人公の名前をダルナにした。したがってダルナの起源はヴァルガに遡って考える必要がある。

ヴァルガは二重の意味でアメリカを意識したものであった。第一に、もとのアイデアはアメコミのスーパーマンだった。スーパーマンは1938年6月にアメリカの『アクション・コミックス』に掲載され、1939年1月には新聞にも掲載された。スーパーマンを読んだラヴェロはフィリピン版のスーパーマンを描きたいと思ったが、アメリカが男性だとすればフィリピンは女性にあたるのでフィリピンにはスーパーヒロインの物語がふさわしいと考えたという⁷⁾。

アメリカを意識したもう1つの点はヴァルガという名前にある。この名前はヴァルガ・ガールに由来する。ペルー出身のアメリカのイラストレーターであるアルベルト・ヴァルガス (Albert Vargas) が1940年に『エクスファイア・マガジン』誌上で発表した女性の扇情的な肖像画はヴァルガ・ガール(バーガ・ガールとも)と呼ばれ、一連の作品は第二次世界大戦のピンナップの象徴となった。アメリカの力強さを象徴するスーパーマンと第二次世界大戦におけるアメリカの象徴であるヴァルガ・ガールを組み合わせることでヴァルガが誕生した。

アメコミのスーパーヒロインにはワンダーウーマンがおり、ヴァルガ／ダルナはワンダーウーマンのアイデアを流用したとの指摘もある。ダルナとワンダーウーマンとの関係は後に検討するが、ラヴェロによればヴァルガを構想したのはスーパーマンを読んだ1939年頃のことであり、ワンダーウーマンの初出(1941年12月)よりも前のことだった⁸⁾。

他の作品からのアイデアの流用に関連して、フィリピンには不思議な力を持った鳥を探そうとする『アダナ之歌』(Ibong Adarna) という17世紀に書かれた古典文学およびそれをもとにしたコメディア(喜劇)があり、ダルナはそこからアイデアを得たのではないかと考えられている。実際には、掲載誌がかわって主人公の名前にヴァルガが使えなくなったためにヴァルガを招来させる少女の名前ナルダ(Narda)を組み替えてダルナにしたのであって、アダナと直接の関係



ダルナが掲載された『ピリピノ・コミックス』の1950年5月27日号の表紙

はないが⁹⁾、後述するようにダルナはアダナの特徴を取り入れていった。

ダルナの誕生

ラヴェロは1949年に『ブラクラク・マガジン』を去り、『ピリピノ・コミックス』(Pilipino Komiks)の第77号(1950年5月13日号)で「ダルナ」の連載を開始した。『ブラクラク・マガジン』では絵もラヴェロが描いていたが、『ピリピノ・コミックス』では作画はネストル・レドンド(Nestor Redondo)が担当した。

ダルナとヴァルガはスーパーヒロインの名前を除けば基本的に同じ設定である。コミック版ダルナの設定を簡単に紹介しておこう。

マサンボン(Masambong)の町に少女ナルダと弟のディン(Ding)が暮らしている。2人には両親がなく、祖母のロラ・アサイ(Lola Asay)の家に寝泊りしている。2人は近所の家をまわり、ディンがハーモニカを吹き、ナルダがそれにあわせて歌うことで小銭を得ている。ある日、流れ星が森に落ちるのを見たナルダたちはその現場で白くて小さな光る石を見つける。ナルダはその石を持ち帰ろうとするが、友人に見つかりそうになって石を口の中に隠す。石は口から体内に入り、ナルダは力が漲るのを感じて失神する。家に運ばれたナルダが目覚め、祖母とディンに事情を話しているとき、白い石に書かれていた「ダルナ」という言葉を口にすると、眩い光に包まれ、大人のスーパーヒロインであるダルナが登場する。ダルナは闇と憎しみを退治す

7) 主人公を女性にした理由について、父親がいなかったラヴェロを守ってくれたのは母親だったためとも述べている。

8) このとき企画を持ち込んだコミック誌の編集者はスーパーヒロインものでは売れないからと掲載を断り、第二次世界大戦後に説得の末ようやく掲載が認められたという。

9) ナルダとはラヴェロが少年時代に親しくしていた友人の名前に由来する。

るためにマルテ星¹⁰⁾から地球に遣わされた正義の戦士で、無垢の人々を助けるために戦う。

ダルナのコスチュームは、両胸に金の星をつけた赤いビキニで、金のメダルを繋いで作ったベルトの真ん中から白い布が垂れている。金の翼をかたどった装飾がついた赤いヘルメットを被り、金のプレスレットをして、赤いブーツを履いている。ワンダーウーマンと共通点が多いが、金(黄色)の星はフィリピン国旗を、ベルトは先住民の腰巻(bahag)を示しており、不思議な石によって変身するのはフィリピンの伝統的なお守り(agimat)から取られたもので、いずれもフィリピンらしさを体現したものとなっている¹¹⁾。

2. 変容——映画とテレビ

ダルナは連載開始直後から人気が出て、1951年に最初の映画が製作された。2015年までに製作された映画とテレビシリーズは、形式と内容から4つの時期に分けることができる。以下、それぞれの時期について、映像化の過程で設定にさまざまな変更が加えられ、ダルナの物語が変容していった様子を紹介する。

第一期のダルナ映画はダルナと異星人や怪物との戦いを中心に据えたものである。1964年映画はダルナ映画の中で敵役を主役にした唯一の作品で、ダルナは3回しか登場しない。

第二期の1973年映画(飛べ)は興行収入の面で大きな成功となり、この作品でダルナを演じたヴィルマ・サントスをダルナ役として4作品が作られた。ヴィルマ・サントスは一般の映画の主演女優として評価が高いが、ダルナ役や、ラヴェロの別の人気作品で人魚姫が題材の『ジェセベル』への出演でも知られる。なお、後に政治家になる¹²⁾ヴィルマ・サントスがダルナを演じた時期は、マルコス大統領が1972年9月に戒厳令を敷いて独裁体制を作ってからピープルパワー革命で倒されるまでの時期と重なっている。

この時期にはコミック版ダルナから外れてさまざまな設定が加えられた。ナルダとダルナを同じ女優に演じさせるために、ナルダの年齢が引き上げられて10

10) マルテは固有名詞のようにMarteと書かれるが、タガログ語で火星を意味する。マルスが自分の名前(Mars)を織り込んだのかもしれない。

11) 映画版ではダルナのコスチュームは何度か変更されている。1964年以降のダルナ映画はフルカラーになり、コスチュームに青が混じることもあった。

12) 1998年にバタンガス州リバ市の市長に当選して3期勤め、2007年にはバタンガス州知事に選出され、現在3期目の任期中である(同一人が州知事に就くことができるのは3期まで)。

(1)第一期(1950~69年)

タイトル	製作年	監督	出演(ダルナ役)
ダルナ Darna	1951	Fernando Poe	ロサ・デル・ロサリオ Rosa Del Rosario
ダルナと鷹女 Darna at ang Babaeng Lawin (Darna and the Hawkwoman)	1952	Carlos Vander Tolosa	ロサ・デル・ロサリオ Rosa Del Rosario
ダルナと邪悪な双子 Si Darna at ang Impakta (Darna and the Evil Twins)	1963	Danilo Santiago	リサ・モレノ Liza Moreno
イスプートニクvsダルナ Isputnik vs. Darna	1963	Natoy B. Catindig	ニダ・ブランカ Nida Blanca
ダルナと木の怪物 Darna at ang Babaing Tuod (Darna and the Tree Monster)	1964	Cirio H. Santiago	エヴァ・モンテス Eva Montes
ダルナと異星人 Si Darna at ang Planetman (Darna and the Planetman)	1969	Marcelino Navarro	ジーナ・パレニョ Gina Pareño

(2)第二期(1973~80年)

タイトル	製作年	監督	出演(ダルナ役)
飛べ、ダルナ飛べ Lipad, Darna, lipad! (Fly, Darna, Fly!)	1973	Emmanuel H. Borlaza, Joey Gosiengfiao, Elwood Perez	ヴィルマ・サントス Wilma Santos
ダルナと巨人 Darna and the Giants	1973	Emmanuel H. Borlaza, Leody M. Diaz	ヴィルマ・サントス Wilma Santos
ダルナvs女異星人 Darna vs. the Planet Women	1975	Armando Garces	ヴィルマ・サントス Wilma Santos
ダルナ (テレビシリーズ) Darna	1977		ロルナ・トレン ティエノ Lorna Tolentino
ダルナ...? Darna, Kuno...?	1979	Luciano B. Carlos	ブレンダ・デル・リオ Brenda Del Rio
拳て! ダルナ拳て! Bira! Darna! Bira!	1979	Tito Sanchez	リオ・ロクシン Rio Locsin
ダルナとディン Darna at Ding	1980	J. Erastheo Navoa, Cloyd Robinson	ヴィルマ・サントス Wilma Santos

代後半の女性とされた。白い石はダルナがナルダに戻るたびに口から出てきて、ダルナに変身するたびに呑み込むことになった。また、この時期のダルナ映画ではダルナがマルテ星出身であることは明言されず、「光の戦士」と呼ばれた。

ヴィルマ・サントス以外がダルナを演じる外伝的な作品も作られ、コメディアンのだルフィーが1979年映画(ダルナ...?)で男性ダルナを演じた(後述)。

1973年映画(巨人)では、異星人が村人たちを捕まえ、注射により巨人化させて村を襲わせる。無言の巨人たちが家を踏み潰し屋根を壊す様子は、フィリピンでしばしば見られる災害である地震や台風が家を壊しているかのようである。巨人は教会も壊そうとするが、キリスト像を見て教会を壊す気力を失う。ダ

ルナは異星人の円盤を破壊し、捕らわれていた村人
たちを救出する。

1980年映画では、弟のディンも超人的な力を身につ
けてスーパーヒーローになる。前半は死体を蘇らせる
女性マッドサイエンティストにナルダが捕まってし
まい、ディンが少年のダルナになってナルダを助ける。
後半はチャイナタウンで子どもたちの誘拐事件が多発
し、ナルダが中国娘を装って捜査に乗り出し、中国系
の女魔法使いに捕まったディンを助け出す。

第三期にはテレビシリーズが1作と映画が2作製作
された。ヴィルマ・サントスのダルナ映画で取り入れら
れた設定が原作通りに戻されたが、ナルダとダルナを
同じ女優が演じるなどいくつかの設定は残された。新
しい設定として、1991年映画ではナルダはマニラで働
くモデルで、弟はディンとドン(Dong)の2人になった
こと、1994年映画ではナルダの祖母にロラ・イサベル
(Lola Isabel)という名前が与えられたことなどがある。

1994年映画がピナトゥボ火山の噴火(1991年)に襲
われたフィリピンが舞台となっているように、フィリ
ピン社会が災いに見舞われていることが背景として
語られる。また、この時期のダルナの特徴として、海外
生まれまたは幼い頃から海外で暮らした外国籍(アメ
リカ籍)の女優がダルナを演じたことが挙げられる。
1991年映画のナネット・メドヴェドは1971年にホノ
ルルで生まれ、父親はロシア系、母親は中国系フィリ
ピン人で、自身はアメリカ国籍である。1994年映画の
アンジャネット・アバヤリはフィリピンで生まれ、幼
い頃にアメリカに移住してアメリカ国籍を取得した
フィリピン系アメリカ人である(注4を参照)。

ダルナ映画のほか、マルス・ラヴェロの原作でダルナ
と作品世界を共有するキャプテン・バーベル(Captain
Barbell)の映画版(1986年)をはじめ、関係する作品
にしばしばダルナが登場した。

第四期にはコミック版のリメイクとテレビシリー
ズの製作が行われた。

2003年、コミック版の『ダルナ』(全3巻)がマンゴーコ
ミックス(Mango Comics)から刊行された。ボビー・ヨ
ンゾン(Bobby Yonzon)がストーリーを作成し、3人の
コミック漫画家が作画した。マルス・ラヴェロの原作に
立ち返っているが、ナルダの弟の名前をリチャードにす
るなどの変更が見られる。ナルダは大学生で、10年前に
白い石を見つけてダルナと一体化していた。ダルナは
ティアマト(Tiamat)星の出身で、ティアマト星にはダ
ルナたちアダルナ族とその宿敵の蛇女王族がいる。

(3)第三期(1986~94年)

タイトル	製作年	監督	出演(ダルナ役)
ダルナ (テレビアニメ) Darna	1986		
ダルナ Darna	1991	Joel Lamangan	ナネット・メドヴェド Nanette Medved
帰ってきたダルナ Darna Ang Pagbabalik (Darna: The Return)	1994	Peque Gallaga, Lore Reyes	アンジャネット・ アバヤリ Anjanette Abayari

(4)第四期(2003~09年)

タイトル	製作年	監督	出演(ダルナ役)
ダルナ (テレビシリーズ) Mars Ravelo's Darna	2005		エンジェル・ ロクシン Angel Locsin
ダルナ (テレビシリーズ) Mars Ravelo's Darna	2009	Dominic Zapata, Don Michael Perez	マリアン・ リヴェラ Marian Rivera

2003年のコミックはそれまでに映画やテレビシ
リーズで使われた設定を取捨選択したもので、この設
定をもとに2005年と2009年にテレビシリーズが作ら
れた。2005年のテレビシリーズには過去にダルナ役
を演じた女優が集まり¹³⁾、日本でも放映された。

2005年と2009年のテレビシリーズはGMAテレビ
局による製作だったが、2012年にABS-CBNテレビ局
がマルス・ラヴェロ作品の製作権を得たことから、製
作局をかえて新たなダルナが製作されることが期待
されている¹⁴⁾。なお、映画『This Guy's In Love With U
Mare』(2012年、ウェン・V・デラマス監督)ではゲイで
あると公表しているテレビ・タレントのヴァイス・ガン
ダ(Vice Ganda)がダルナに扮している¹⁵⁾。

3. 再生と継承——親子・女装・ゲイ

「変身」をキーワードにダルナについて考えてみた
い。1つは文字通りの変身で、ナルダがダルナになる
ことである。2つ目はダルナの原作がさまざまな物
語の影響を受けて「変身」(変容)していく様子である。
3つ目は、そのようなダルナの「変身」の結果として、
フィリピンに新しいスーパーヒロインの物語が創出

13) ダルナの祖母役は1969年映画のジーナ・パレニョ、マルテ星の
石の守り主役は1977年テレビシリーズのロルナ・トレンティー
ノが演じた。『キャプテン・バーベル』の2003年映画でダルナ
を演じたレジーナ・フェラスケス(Regina Velasquez)が主題
歌を歌った。

14) 2015年12月のメトロマニラ映画祭では2016年公開予定の『ダ
ルナ』の予告編が上映された。

15) 筆者未見だが、『Who's That Girl?』(2011年、ウェン・V・デラ
マス監督)および『Bekikang: Ang Nanay Kong Beki』(2013年、
ウェン・V・デラマス監督)にもダルナが登場するらしい。



2003年に再刊行されたダルナ(第1巻)〈左〉とダルナ研究書〈右〉。表紙は2009年テレビシリーズでマリアン・リヴェラが演じたダルナ

されていることである。

変身するダルナ

コミック版と映画版・テレビ版ではナルダとダルナの関係が異なる。コミック版ではナルダは幼い少女、ダルナは大人で、ナルダがダルナになるのではなく、ナルダが媒介になってダルナを招来する。したがってナルダはダルナに変身しているわけではない。ダルナが招来されている間にナルダの存在が見えないことは、ナルダがダルナと一体化しているためと説明される。これに対して映画版では、ダルナ役を演じる女優にナルダも演じさせるためにナルダの年齢設定を引き上げ、その結果としてナルダがダルナに変身することになった。

また、コミック版では白い石は一度呑み込むと体の中に留まり、「ダルナ」と言うだけでダルナを招来できた。ナルダが敵に捕まって猿轡をかまされるとダルナに変身できないが、猿轡を外されるとダルナに変身できる。これに対して映画版やテレビ版では、ダルナからナルダに戻るたびに白い石を口から出し、ダルナに変身するたびに白い石を呑み込むという設定になった。このため、ピンチになったときに変身するために白い石をどうやって手に入れるかという小さなドラマが生まれた¹⁶⁾。

16) 1973年映画(巨人) には、ナルダが敵の一味に捕まって縛り付けられ、手首から先しか動かせない状態で白い石を探り当てて口に投げ入れることで変身する場面がある。これは『ウルトラセブン』の第46話「ダン対セブンの決闘」で、モロボシ・ダンが地球征服をたくらむサロメ星人に捕まって縛り付けられ、手首から先しか動かせない状態で変身アイテムのウルトラアイを探り当ててウルトラセブンに変身する場面を思い出させる。

コミック版の設定では変身するつもりがなくても「ダルナ」と口にすることで変身してしまうのに対し、映画版・テレビ版では石を呑む手間がかかるために変身するという明確な意思のもとダルナに変身する。自らの意思で変身することにより、なぜ変身するのか(なぜ悪者退治や人助けを引き受けるのか)を自問せざるを得ない状況が生じた。

ダルナの産休と女装版ダルナ

コミックから映画・テレビへとメディアを移してリメイクを重ねる過程で、ダルナの物語にはさまざまな変更が施されていった。そこにはフィリピン内外のさまざまな物語の形式や内容が参照・引用されている。

原作ではダルナは一代(一人) 限りだが、映画版やテレビ版でダルナは複数存在し、さらに世代交代も経験している。1979年映画(ダルナ・・・?)ではダルナが妊娠して任務を遂行できなくなり、代役としてドルフィーが女装してダルナを演じた。物語の最後には生まれたばかりの娘を伴って親子のダルナが登場した。

劇中のダルナの言葉によれば、妊娠の相手は日本のロボットアニメのマジンガーZとボルテスVである。1978年にフィリピンのテレビで日本のロボットアニメが放映されると子どもたちの間で大人気となり、1年以内に3つのテレビ局で13のロボットアニメが放映されるまでになった¹⁷⁾。日本のロボットアニメが人気を博したのは、アメコミのスーパーヒーローが自分の体を鍛えて敵と戦うのに対し、科学技術を利用することで自分の体が小さいまま大きな敵と戦えるという日本のロボットアニメの物語が希望を与えたという要素があったのではないと思われる。

ダルナがスーパーマンからアイデアを得ていることは原作者が公言した通りである。ワンダーウーマンや『アダダナの歌』から着想を得たといった指摘については、製作過程を見るとどちらも当てはまらないが、ダルナはこれらの作品の特徴を積極的に取り入れていった。ダルナは身体が銃弾をはじく設定だったが、ワンダーウーマンがプレスレットで銃弾をはじくことから、1991年映画のダルナはプレスレットで銃弾をはじき、ダルナがワンダーウーマンの真似だと見られる原因となった。ヘッドギアの飾りの形を鳥の羽

17) 放映直後からロボットアニメが子どもに与える悪影響を懸念する声が聞かれ、1979年9月にマルコス大統領によってロボットアニメのテレビ放映が禁じられた。この出来事は日本では『ボルテスV』の放映が禁じられたとして知られているが、実際には『マジンガーZ』や『闘将ダイモス』など13の番組がいっせいに放映禁止になった。

根のようにし、2003年のコミック版でダルナの種族名をアダルナ族と名づけたため、『アダルナの歌』との関係が追認され、ダルナはフィリピンの古典文学の延長に位置づけられた。

シャシャ・ザトゥルナ —— ダルナから生まれたスーパーヒロイン

ダルナに着想を得たオリジナルのスーパーヒロインも生まれた。シャシャ・ザトゥルナ (Zsazsa Zaturannah) は、コスチュームや設定がダルナによく似ているが、変身前の人間体がフィリピンで「バクラ」と呼ばれるゲイである点がダルナと決定的に異なっている¹⁸⁾。

シャシャ・ザトゥルナは、カルロ・ヴェルガラ (Carlo Vergara) が2002年12月に自費出版したコミック『シャシャ・ザトゥルナの大冒険』(Ang Kagila-gilalas na Pakikipagsapalaran ni Zsazsa Zaturannah) の主人公のスーパーヒロインである。2002年にナショナル・ブック賞を受賞し、ビジュアルプリント社 (Visual Print Enterprises) から出版された。2012年に続編の『シャシャ・ザトゥルナ、マニラに行く』(Zsazsa Zaturannah sa Kalakhang Maynila) が刊行された。

ザトゥルナも映画や舞台になった。ダルナの1991年映画を監督したジョエル・ラマンガンの監督により2006年に映画『シャシャ・ザトゥルナ: ザ・ムービー』(Zsazsa Zaturannah: Ze Moveeh) が製作・公開された。歌手のシャシャ・パディラ (Zsa Zsa Padilla)¹⁹⁾ がザトゥルナ役を演じ、音楽劇の要素が多く取り入れられた²⁰⁾。同じ年にはフィリピンの芸術総合施設フィリピン文化センターを拠点とするピリピノ劇団 (Tanghalang Pilipino) によるミュージカル『シャシャ・ザトゥルナ: ザ・ミュージカル』(Zsazsa Zaturannah: Ze Muzikal) も公演され、ユーラ・ヴァルデス (Eula Valdez) がザトゥルナを演じた。2011年まで毎年行われた公演日数は通算91日間となり、ピリピノ劇団の最多公演作品となった。

あらすじは以下の通りである。フィリピンの地方の町でヘアデザイナーとして生計を立てているアダは、自分は間違っただけで男の体に生まれてしまった女だと考え、いつか本当の自分の姿を手に入れたいと夢見ている。ある日、ザトゥルナと書かれたこぶし大の石が空



2002年に刊行された『シャシャ・ザトゥルナ』のコミック(左)と2012年に刊行された『シャシャ・ザトゥルナ』の続編(右)



から落ちてくる。助手でバクラのディディに勧められるままに石を吞んで「ザトゥルナ」と叫ぶと、超人的な力が備わった大人の女の体になる。X星から地球に来たフェミナから全世界の男を滅ぼす戦いへの共闘を求められるが、フェミナに力づくで相手を滅ぼそうとする男の発想が見られるのは男になりたいという願望の表れだと見抜き、石を吐き出してフェミナに投げると、それを呑み込んだフェミナは豚の頭をした男の体になる。ザトゥルナになれなくなったアダは、思いを寄せていた男性ドドンからプロポーズされ、男の体のままバクラとして生きていくことに自信を持つ。

アダ／ザトゥルナたち地球人はタガログ語を話すのに対してX星のフェミナたちは英語を話すこと、X星のフェミナの4人の部下にはそれぞれフィリピンの著名な女優の名前がつけられていること、墓地でのゾンビ軍団との戦いでザトゥルナは自分がバクラであることを許さずに亡くなった父親のゾンビと対面し、依然としてバクラであることを認めようとしないう父親のゾンビを打倒することなど、ザトゥルナの物語からはさまざまな意味を読み解くことができるだろう。ただし、本稿の議論に即して重要なのは、ダルナの物語が「変身」した結果として登場したザトゥルナの物語が力づくで敵を倒すことを否定したスーパーヒロインであること、そしてそのことを通じてフィリピン社会の多様な人々を取り込んで主人公にして物語が編まれていることである²¹⁾。

18) シャシャ・ザトゥルナを扱った学術論文に [Reposar 2008] [Reyes 2009] がある。日本語での紹介には [鈴木 2012] [玉置 2013] がある。

19) 夫はダルナの1979年映画で女装版ダルナを演じたドルフィー。

20) 日本では2007年に東京国際シネシティフェスティバルで『シャシャ・ザトゥルナ』の邦題で公開された。

21) 本稿ではゲイが変身するザトゥルナを紹介したが、ほかにも、たとえば地方出身者が上京先のマニラでスーパーヒロインに変身する『スーパーインダイ』がある。ビサヤ地方の言葉で「お嬢」を意味する「インダイ」という命名は、ルソン島以外の地方からもスーパーヒロインを出せるというアピールに見える。



フィリピン・マンガ100年史の研究書の表紙にはシャンヤ・ザトゥルナが使われた

おわりに

リメイクが生むオリジナリティ

スーパーマンとヴァルガ・ガールに着想を得たダルナは第二次世界大戦後のフィリピンにアメリカのイメージを伴って登場し、映画・テレビシリーズによる映像化を経て、国内外のさまざまな物語の影響を取り入れて新しい形式や内容の物語を作り出していった。さらにダルナに着想を得た物語も多数作られ、外来の物語の要素を取り入れたり改変を加えたりすることで自分たちの物語にしている様が見られる。

フィリピンのコミックや映画には外国(特にアメリカ)の作品を下敷きにしたものが多く、フィリピン人は創造性に欠けるとの批判も聞かれる。しかし、フィリピンの人々は作品に触れたときにその物語の構造を見抜く力に長けており、自分たちの社会の文脈に照らして物語を語りなおしたいという欲求が沸いてくるように見受けられる。時代が移り変わって伝達媒体やフィリピン社会の環境が変われば、それに応じて物語も語り直される。ダルナは、映像化によって変身という要素、フィリピン社会が直面する災いの要素、さらに在外フィリピン人の要素を取り入れてきた。ダルナに着想を得てゲイや地方出身者が主人公となる物語も編まれている。繰り返し語り続けられることを通じてダルナは国民の物語になり、このような物語の共有を通じてフィリピン国民が形作られていく。

ダルナが何度もリメイクされパロディが作られるほどの国民的スーパーヒロインであるのに対し、男性のスーパーヒーローと言えばスーパーマンであり、ダルナに匹敵する地元のスーパーヒーローは存在しない。

い。キャプテン・バーベルなどもいるが、いずれの映画にもダルナが客演していることがダルナが別格であることを示している。

フィリピンで熱狂的崇拝の対象となっているキリストのイメージは幼きイエズスと受難のイエズスであり、福音を述べ伝えるキリストや復活したキリストには強い熱狂が見られないという[清水 1991]。冒頭で述べたようにフィリピンのヒーローは志半ばで斃れる「殉教者」のイメージを持つ。これを「聖なるヒーロー」と呼ぶならば、破壊や殺戮に手を染めてでも自らの信じる正義を実現しようとする「正義のヒーロー」はスーパーマンなど外来のヒーローが担ってきた。ダルナは、アメリカのイメージを伴って創造され、物語上も異星の出身であることからその起源は外来性を帯びているが、リメイクを重ねていくことでオリジナルな地元のヒロインとしての位置づけを得つつある。ダルナの物語が新しい要素を取り入れながら繰り返し語り続けられていることは、フィリピン社会にスーパーマンに代表されるようなアメリカ的な「正義のヒーロー」を待望する欲求が確かに存在する一方で、それとは異なる方法で社会の課題を解決するヒーロー／ヒロインのあり方が模索され続けていることを示しているのではないだろうか。

舞台芸能と政治

2016年の大統領選挙について論じることが本稿の目的から外れるが、フィリピンの政治と映画の結びつきについて筆者の今後の研究課題を示すという意味で簡単に触れておきたい。

フェルナンドと並ぶ国民的俳優のジョセフ・エストラーダが1998年に大統領に選出され(2000年に任期途中で解任)、フィリピンは映画俳優が大統領になる国として知られている²²⁾。本稿でも触れたようにフェルナンドも2004年の大統領選に出馬したし、マルコス独裁政権下でダルナを演じたヴィルマ・サントスは後に市長と州知事を務めている。ほかにも政界進出した映画俳優は男女ともに少なくない。このことに関連して舞台芸能と政治の関係について考えてみたい²³⁾。

1990年代に都市にモールが建設されてシネコンが

22) アメリカでは映画俳優のロナルド・レーガンが1967年にカリフォルニア州知事になり、1981年から1989年まで大統領を勤めた。

23) エリートの政治と庶民の政治の道徳的対立からフィリピンの政治を捉える[日下 2013]や、ピープルパワー革命の背後にあるアメリカ的ポップカルチャーとカトリシズムの精神性を読み解く[清水 1991]がある。

作られ、映画の観客層が年配の男性から若い女性に移っていくと、陰のある街角の劇場で上映されていたアクション映画にかわってラブストーリーが多くなり、そのためかつてアクション映画で活躍した俳優たちは他の道を探して政界やテレビに進出した。

アメリカ時代の幕開けとほぼ同じ頃にフィリピンに紹介された映画は、1930年代のトーキーの到来によって大衆文化の主役の座に就いたが、それは20世紀初頭に人気を博していたサルスエラ（音楽劇）を受け継ぐ形でもたらされた。サルスエラはスペイン時代の末期に主に革命劇として作られ、アメリカ時代に入っても登場人物をスペイン人からアメリカ人に読み替えることで革命劇としての性格を維持した。1903年～1905年の作家および関係者の大量逮捕を契機にサルスエラは表面上は恋愛劇の形をとるようになる。フィリピン大学に所蔵されているタガログ語サルスエラを調査したラペナ・ボニファシオは、1909年頃にサルスエラ作家たちが革命劇から恋愛劇に切り替えたと推測している[Lapena-Bonifacio 1972]²⁴⁾。

この頃、現在のフィリピン国会の前身にあたるフィリピン議会が開設され、全国から選出された80人の代議士が1907年の第1回会合の会場であるマニラ・グランドオペラハウスに集まった²⁵⁾。サルスエラを含む芸能に関して当時最も大きな舞台であったグランドオペラハウスに代議士が集まったことは、それまで芸能の舞台を通じて表現されていた民衆の声が議会の舞台を通じて表出されることを象徴していた。今日のフィリピンでも、政治家たちによる茶番劇を揶揄して「まるでコメディア（喜劇）だ」と言うように、舞台芸術と政治は密接に絡んでいる。フィリピンで映画俳優が政治家になることには、単なる人気投票ではなく、フィリピン社会に根ざした歴史的・文化的な意味があるのかもしれない。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト（白石隆ほか訳）2007『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源

と流行』書籍工房早山。

アンダーソン、ベネディクト（糟谷啓介ほか訳）2005『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社。

イレート、レイナルド・C.（清水展ほか監修）2005『キリスト受難詩と革命——一八四〇～一九一〇年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局。

日下渉 2013『反市民の政治学——フィリピンの民主主義と道徳』法政大学出版会。

清水展 1991『文化のなかの政治——フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂。

鈴木勉 2012『フィリピンのアートと国際文化交流』水曜社。

玉置真紀子 2013「スペイン発、アメリカ経由して辿り着いたホームランド、フィリピン」『ユリイカ』2013年3月臨時増刊号、青土社、pp.244-245。

寺見元恵編・監訳 1992『フィリピンの大衆文化』めこん。

山本博之 2016「フィリピンの国民的物語の身体化」谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』青弓社、pp.101-125。

リサル、ホセ（岩崎玄訳）1976a『ノリ・メ・タンヘレ——わが祖国に捧げる』井村文化事業社／勁草書房。

リサル、ホセ（岩崎玄訳）1976b『反逆・暴力・革命——エル・フィリプステリスモ』井村文化事業社／勁草書房。

Lapena-Bonifacio, Amelia. 1972. *The “Seditious” Tagalog Playwrights: Early American Occupation*. Zarzuela Foundation of the Philippines.

Reposar, Eleanor Sarah. 2008. “Carlo Vergara’s Zsazsa Zaturannah and the Tradition of Subversion in Philippine Komiks”. Priscelina Patajo-Legasto (ed.) . *Philippines Studies: Have We Gone Beyond St. Louise?* The University of the Philippines Press. pp.427-443.

Reyes, Soledad S. 2009. *From Darna to Zsazsa Zaturannah: Desire and Fantasy: Essays on Literature and Popular Culture*. Anvil Publishing.

24) これはタイトル（および脚本の一部）から推測したもので、舞台上の衣装や仕草に込められたメッセージや脚本にない台詞が発せられた可能性などは考慮に入れられていない。

25) 高架鉄道（LRT）のドロテオ・ホセ駅に隣接し、現在はホテルになっている。ホテルの入り口には第1回フィリピン議会開設を記念する碑が立ち、ホテル1階の喫茶室の壁にはフィリピンの往年の俳優たちのパネルが飾られている。